



## 2019年ラグビーワールドカップ日本開催 (IRSME15017)

平成 27 年 9 月 29 日 山本 貢郎

2019年ラグビーワールドカップが日本で開催される。先日、世界ランキング2位の南アフリカに対し大金星を上げたことで日本でもラグビーの知名度が一気に向上したが、それ以前は新国立競技場のデザイン白紙問題で話が出たときに初めて日本でのラグビーワールドカップ開催を知った人も多かったようだ。これまで極めて認知度が低かった2019年ラグビーワールドカップ日本開催について改めて考えた。

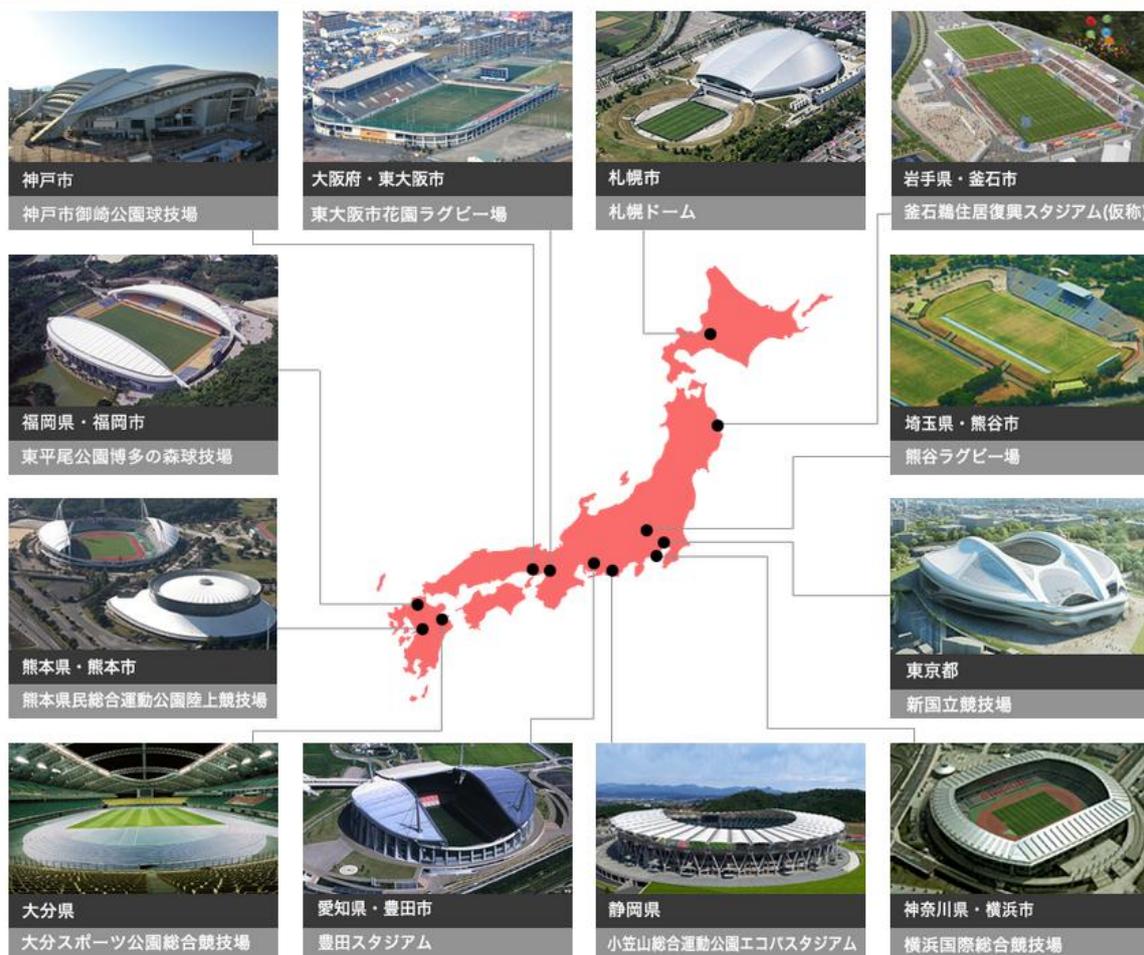
### ■ ラグビーワールドカップ概要

- ・1987年から開催されており、2015年9月イングランドで第8回大会が開催された
- ・世界でのべ40～42億人が視聴する大会で、夏季オリンピック・ワールドカップサッカーに次ぐ世界3大スポーツの祭典と言われる
- ・第9回大会は2019年9月6日から日本（アジア初開催）で約6週間開催される
- ・開催地は下記の12か所の予定（新国立は白紙）

開催都市	試合開催会場	収容人数(人)
札幌市	札幌ドーム	41,983
釜石市	釜石鵜住居復興スタジアム(仮称)	16,187
熊谷市	熊谷ラグビー場	24,000
東京都	新国立競技場	80,000
横浜市	横浜国際総合競技場	72,327
静岡県	小笠山総合運動公園エコパスタジアム	50,889
豊田市	豊田スタジアム	45,000
東大阪市	花園ラグビー場	30,000(予定)
神戸市	御崎公園球技場	30,132
福岡市	東平尾公園博多の森球技場	22,563
熊本市	熊本県民総合運動公園陸上競技場	32,000
大分県	大分スポーツ公園総合競技場	40,000

平成 27 年 9 月 29 日

(IRSME15017) 2019 年ラグビーワールドカップ日本開催



出典：2019 All For Japan Team サイト（日本ラグビーフットボール協会公認）

新国立競技場のデザインの白紙でも問題になったのが収容人数である。開幕戦と決勝戦、3位決定戦などは収容人数を6万人以上とWR（ワールドラグビー。国際統括団体 サッカーで言うFIFAのような団体）が求めており、日本でラグビー開催が可能でかつ6万人を収容できる競技場が、サッカーW杯の開催実績もある横浜国際総合競技場など数か所に限られるからだ。

後述するが、8万人収容予定であった新国立から7万2千人収容の横浜に会場が移されると、計算上1試合で8千人の入場者数が減少する。横浜から別の会場で実施されることになる試合では、さらに収容人数が減ることになるため、収支で大きな差が出る。

また新国立競技場のこけら落としとしてのラグビーワールドカップ開幕戦の位置づけであったが、そのもくろみも崩れた。

平成 27 年 9 月 29 日

(IRSME15017) 2019 年ラグビーワールドカップ日本開催

## ■ ラグビーワールドカップの問題点

しかしラグビーワールドカップの根本の問題は競技場の収容人数ではない。一番の問題は日本でのラグビー人気の低迷である。

世界のラグビー人口はここ 4 年間で 200 万人増え、660 万人となっている。これは 2016 年リオデジャネイロオリンピックから、7 人制ラグビーが男女とも正式種目に採用されることもあるだろう。

一方で日本のラグビー人口はおよそ 12 万人であり、全盛期の 80 年代～90 年代前半から大幅に減少している。しかもそのうち女子は 4,659 名となっており、女子への普及が大幅に遅れている事がわかる。

日本ラグビーフットボール協会は、競技者を 20 万人に増やすという目標を掲げているが、道のりは遠い。サッカーは約 90 万人、バスケットボールが約 63 万人、テニスが約 46 万人、バレーボールで約 39 万人の競技人口がいるが、ラグビーはフットサルの約 12 万人や同じく 20 万人を目指しているハンドボールの約 11 万人と同じ水準だ。

77 年からの新日鉄釜石の 7 連覇、84 年のドラマ「スクールウォーズ」、88 年からの神戸製鋼 7 連覇などの影響で 80 年代から 90 年代前半はラグビーバブルと言える人気であったが、92 年のサッカー J リーグ開幕や 90 年からのスラムダンク (バスケットボール漫画) 連載などにより他の競技人口が増える中、ラグビー人口が減少している。例えば高校ラグビー全国大会予選では参加 2 校の島根県を始め、4 校や 5 校の参加といった都道府県もすくなくない。

また 81 年に 66,999 人を記録した早明戦の観客数は、昨年 21,602 人と 3 分の 1 以下となってしまうている。

## ■ 今後の課題

大会組織委員会はチケットの売上収入目標を 300 億円としている、全 48 試合でこれだけの売上を確保するには 1 試合あたり 6 億 2,500 万円が必要になる。単純にチケット 1 枚 2 万円としても、合計で 150 万人、1 試合 3 万人以上の入場が必要な計算になる。早明戦では V I P 席で 6,000 円、日本代表の試合でも最高額が 1 万円であることを考えると、明らかに計画に無理がある。

過去一番入場者数が多いフランス大会で 225 万枚、次いで多いのが 2003 年オーストラリア大会の 189 万枚、ウェールズ大会の 170 万枚と続いているが、それぞれ熱狂的なラグビー人気を誇る国ばかりで、しかも、ヨーロッパやオセアニアなど近隣のラグビーファンの集客も見込めた。しかし今回は前述のとおり不人気の日本で、しかもラグビーが盛んでないアジアでの

平成 27 年 9 月 29 日

(IRSME15017) 2019 年ラグビーワールドカップ日本開催

---

開催である。

組織委員会はワールドラグビーに 9,600 万ポンド（約 177 億円）の保証金を支払う義務があり、開催地自治体から合計で 36 億円の負担金を得る計画をしているが、その他にも運営費や改修費で 280 億円の費用が見込まれており、非常に苦しい状況だ。国内ローカルスポンサー契約も認められていないこともあり対策は急務である。

## ■ 期待を込めて

ラグビーワールドカップは、東京オリンピックと異なり全国各地で開催されるため、その経済効果は全国に及ぶ。世界各国からの来場者、宿泊施設を始め、小売業や旅客運送業、製造業など様々な業種で認知度アップと国内外への発信の大きな機会になるだろう。是非自治体や経済界、学校などが協力してラグビーワールドカップの成功とラグビーの普及、そして全世界への日本の良さを発信して欲しい。

組織委員会や日本ラグビーフットボール協会は、各地でイベントや P R サポーターを募集（先着 2,019 名にポスターやステッカーを配布し宣伝してもらおう）、H P や Facebook、ツイッターなどでの P R を始めているが効果が出ているとは言い難い。

2016 年からスーパーラグビー（ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ 3 か国のチームによるラグビー最高峰のリーグ）に日本チームが参戦するなど大きな取組もあるが、ラグビーのブランディングやトップリーグ・大学・高校ラグビーの広報、メディア戦略などしっかりと進めてほしい。

南アフリカ戦勝利という追い風を一過性のものに終わらせてはならない。著者も P R サポーターとして登録し、微力ながら個人宣伝部長として愛車にステッカーを貼ることにしよう。（了）